英語科で重点的に育成を図る資質・能力とその手だて

豆野　元春
乗富　智子

挑戦心
失敗や間違いをおそれずに相手に自分の伝えたいことを伝えようとする
具体的な課題（ゴール）を意識して粘り強く学習に取り組んでいる

①コミュニケーションを行う目的、場面、状況を明確にし、子どもの意欲を高められるような言語活動を設定する。

CROWN Jr.は、はじめに学びの見通しをもつ HOP(Get Ready)、主に言語材料を学ぶ STEP(2~3Lesson)、ゴールとなる言語活動を行う JUMP からなる大単元の構成となっている。HOP と JUMP は内容がつながっていることから、本稿では JUMP を中心に、HOP における実践についても述べる。

第６学年 JUMP Presentaton1 This is our school. のねらいは、教師などに伝えるために、自分たちに共通のことや、学校行事の時期や魅力について、簡単な語句や基本的な表現を用いて自分の考えなどを伝えることである。本単元では「新しくいらっしゃった先生方に附属小学校を紹介しよう」という言語活動を設定した。附属小のことをあまりよく知らない教師たちに、最高学年となった子どもが附属小の良さや魅力を伝える学校紹介である。

HOP では、学期全体の学習の見通しをもたせ、１学期のゴール「新しくいらっしゃった先生方に附属小学校を紹介しよう」を子どもと共有した。その際に、まだ知らない教師のことを少しでも知り関心をもたせるために、それぞれの教師の好きなこと、得意なことや趣味などについて、英語で聞かせた。さらに、ゴールを共有した後、「まず、やってみよう」とペアの友達を新任の教師と見立て、英語で附属小学校の紹介をさせた。

Ａ児は教師の紹介を聞き取り、Ｂ教諭が体育科の教師で、水泳が得意であることを知った。その上で、Ｂ教諭にマラソン記録会や運動会について伝えたいと考えた。Ａ児のふり返りには、「先生が何の先生で、どんなことをしているかが知れた」と書かれており、新任の教師についてわずかでも知ることができたことにより、新任の教師に対して関心をもつことができたことがわかる。しかし、「まだ話す内容を決めていない。どんなことを言うか（決めて）、スラスラいえるようになる」と、今の自分ができないことを自覚している様子も見られた。「まず、やってみよう」と一度子どもにゴールの言語活動をさせたことにより、子どもは今の自分ができることとできないことを自覚し、これからの学習で自分が何を学べば良いかがわかり、ゴールに対する意欲を高めることができた。

JUMP の学習では、１時間目に新任の教師たちが前任校の様子について話す動画を視聴させた。動画では、前任校の名前や場所、各学校の行事や特色、その学校ならではの良さを語ってもらった。

Ｃ児は、教師たちの学校紹介を聞いて、左のような感想をもっていた（資料１）。他校の楽しそうな学校行事の様子を聞いて羨ましい気持ちをもちながらも、附属小学校ならではの良さや楽しさを考えようとしてい

> 附属小よりも全然ちがったけど、それぞれに良いところがありました。もちろん附属小学校のいいところもいっぱいあるし、他の小学校も楽しそうでした。（中略）
> それぞれちがうけど、良い所があると知れてよかったです。

資料１　Ｃ児のふりかえり

た。C児は、学校紹介で以下のように附属小学校の行事を紹介した（資料２）。下線部にあるように、正

> Hello. My name is C. We have *Fujidana-Otogikai*. It is in May. We sing *Fujidana* songs. All students and teachers poem and story. I like *Fujidana-Otogikai*. Thank you.

資料２　C児の学校紹介

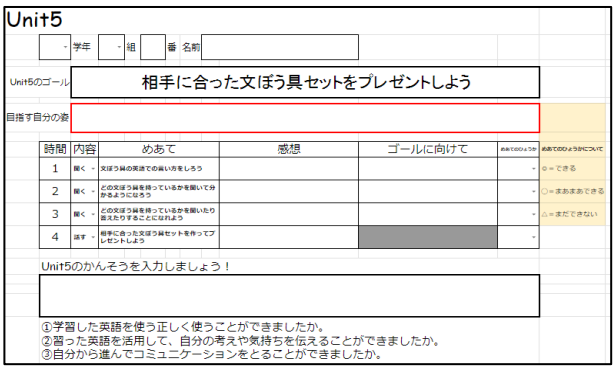
確ではなかったものの、英文を書いたり翻訳機を使用したりせずに、学校紹介をすることができた。また、C児は「学校紹介で伝えたいことを伝えられましたか」の問いに「十分伝えられた」と回答しており、その理由として、「正しい文章だったかはわからないけど、絵や写真などを活用して、伝えたいことは十分伝えられたと思うからです。１学期をかけて頑張ってきた成果が発揮できたので良かったです。」と記している。

以上のことから、コミュニケーションを行う目的、場面、状況を明確にし、子どもの意欲を高められるような言語活動を設定したことで、子どもはゴールへの意欲を高めるとともに、失敗や間違いをおそれずに自分の伝えたいことを伝えることができた。一方で、正しさにこだわるあまり、安易に翻訳機を使用したり、書いた文章を暗記して発表したりする子どももいた。挑戦心の育成にあたっては、子どもの意欲を高める言語活動の設定に加え、日頃の授業の中で失敗や間違いをおそれないことや、これまで学習した表現を活用して伝えることなどをくり返し指導していく必要がある。

②学習のゴールに対して今の自分がどこに位置付くかを子どもが自覚できるようにする

第４学年 Unit5 Do you have a pen? における単元のねらいは、文房具などの学校で使うものや、持ち物を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しみ、それらを用いたやり取りができるようになることである。本単元のゴールには相手に合った文房具セットをプレゼントする言語活動を設定し、相手がどの文房具をどれだけ持っているのかを尋ねたり答えたりすることができるようにした。

単元はじめにゴールについて子どもと共有し、その後毎時間の学習の最後にスプレッドシートにふりかえりを記入する時間を設けた（資料３）。スプレッドシートには「単元のゴール」「目指す自分の姿」「感想」「ゴールに向けて」の欄を設けることで、子どもがゴールや自分の目指したい姿を踏まえた自身の学習の現状を自覚し、次の学習へ生かすことができるようにした。


Unit5

学年　組　番　名前

Unit5のゴール　相手に合った文ぼう具セットをプレゼントしよう

目指す自分の姿

時間	内容	めあて	感想	ゴールに向けて	自分でめあてのようなことが	めあてのようなことについて
1	聞く	文ぼう具の英語での言い方をしろう				◎＝できる
2	聞く	どの文ぼう具を持っているかを聞いて分かるようになろう				○＝まあまあできる
3	聞く	どの文ぼう具を持っているかを聞いたり答えたりすることになれよう				△＝まだできない
4	話す	相手に合った文ぼう具セットを作ってプレゼントしよう				

Unit5のかんそうを入力しましょう！

①学習した英語を使う正しく使うことができましたか。
②習った英語を活用して、自分の考えや気持ちを伝えることができましたか。
③自分から進んでコミュニケーションをとることができましたか。

資料３　ふりかえりのスプレッドシート

D児のふりかえりの内容を見ると、まず単元の１時間目の授業後のふりかえりでは、感想に「文房具の英語での言い方を知ることができました。」、ゴールに向けては「もっと文房具の英語をスラスラ言えるようになりたいです。」と記入している（資料４）。このことから、「相手に合っ

時間	内容	めあて	感想	ゴールに向けて
1	聞く	**文ぼう具の英語での言い方をしろう**	文房具の英語での言い方を知ることができました。さらに、友達と、楽しくゲームをすることもできました。とても楽しかったです！	もっと文房具の英語をスラスラ言えるようになりたいです。
2	聞く	**どの文ぼう具を持っているかを聞いて分かるようになろう**	文房具の言い方をすらすら言えるようになった。 どの文房具を持っているのかをしっかり聴きとれるようになりたいです！	次の時は、もっと、Do you have~　のところを聴き分けたいなと思いました！また、 Yes,I do.と、No,I do not .をしっかり言えるように気をつけたいです！
3	聞く	**どの文ぼう具を持っているかを聞いたり答えたりすることになれよう**	答えたり聞いたりすることができるようになりました。よかったです！来週がとても楽しみです	次の時は、迷わずスパッと言いたいです
4	話す	**相手に合った文ぼう具セットを作ってプレゼントしよう**	私は、友達に、文房具セットを完璧に渡すことができました！楽しかったです！	

資料４　D児のふりかえり

た文房具セットをプレゼントしよう」というゴールに対し、まだ文房具の英語表現において自身の定着が不十分であることを本人が自覚していることが分かる。次に、2時間目のふりかえりでは、感想に「文房具の言い方をすらすら言えるようになった。どの文房具を持っているのかをしっかり聴きとれるようになりたいです。」、ゴールに向けては「次の時は、もっと、Do you have～？のところを聴き分けたいなと思いました。また、Yes、 I do.と、No、 I don't .をしっかり言えるように気をつけたいです。」と記入している。そのため、子どもはゴールを意識しながら、授業終了時点での自身の様子をふりかえりこれからどのような力をつけるべきかを自覚していることが分かる。このことから、毎時間の学習で「目指す自分の姿」「感想」「ゴールに向けて」の視点でふりかえりを行うことで、子どもが学習のゴールに対して今の自分がどこに位置づくかを自覚できるようになったと言える。

このように、子どもが学習のゴールに対して今の自分がどこに位置づくかを自覚できるようになることで、より一層学習に目的意識を持って取り組むことができるようになる。今後の学習においても、ゴールを意識させながらふりかえりをさせるとともに、そのふりかえりを基にした教師からの適切なフィードバックを与えることで、子どもの挑戦心の育成につなげていきたい。

聞く力 教師や友達の話を聞いて、その内容や、自分が伝えたいことを伝えるときに必要な言語材料を聞き取っている

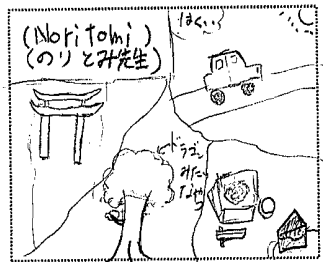
①聞く目的（内容や英語表現など）を明確にする

第6学年 STEP Lesson 3 I went to Hawaii.では、先生や友達に夏休みの思い出を伝えるために、過去の出来事や行ったことなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分の考えなどを伝えることができることをねらいとした。単元末には、夏休みの絵日記をかき、友達同士で読み合う言語活動を設定した。

単元のはじめに、教師の夏休みの思い出を聞いてそれを絵に表す活動を行い、教師の話す英語の内容に着目できるようにした。さらに次時では、自分の思い出を表した絵日記を見ながら「一度英語で言ってみる」という活動を行った。その後、教師が作成した絵日記の絵を見ながらもう一度教師の夏休みの思い出を聞くことで、必要な言語材料に気付くことができるようにした。

教師の夏休みの思い出を聞いて絵に表す活動を行ったことで、「どんなことを言っているかな」と発問しなくても、子どもは教師の話す内容に着目して聞き取ることができた。全ての単語の意味がわからなくとも、キーワードとなる単語を聞き取って、大まかな内容を理解することができた（資料５）。

I went to Hakui. I visited a shrine.
I saw a big tree there. It looked like a dragon.
I ate soba and cakes. I enjoyed driving.

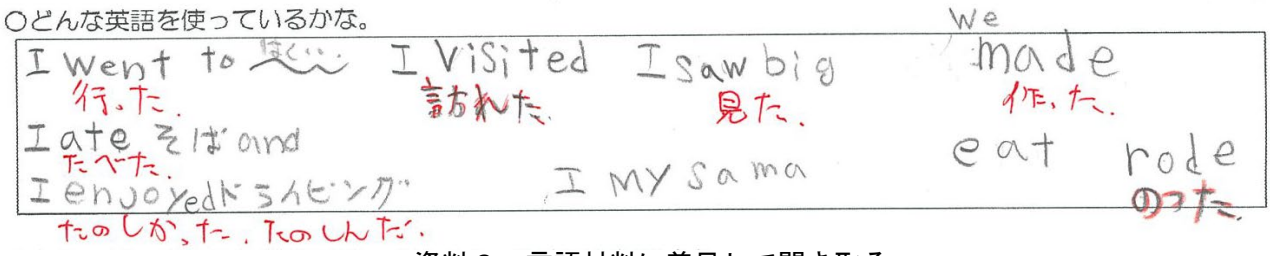


資料５　教師の話す夏休みの思い出とそれを表した絵

また、自分の絵を見ながら「一度言ってみる」という活動を行ったことで、子どもは自分が言えることと言えないことがより明確になった。授業の中で「困ったことは？」と問いかけると、「単語は言えるけど文章で言えない。」「単語と単語をどうつなげていいかわからない。」と答えていた。そこで教師の作成した絵日記の絵とともに教師のモデルを示した。ここでのモデルは、前時に聞かせた教師の夏休みの思い出と同一のものである。前時に教師の思い出を絵に表していることから、おおまかな内容は理解できているため、子どもは英語表現に集中して聞くことができた。子どものワークシートを見ると、自分が知りたい言語材料について、文章で聞き取っ

ていることがわかる（資料６）。子どもが知りたいと思ったタイミングで教師がモデルを示したことにより、子どもは自分が伝えたいことを伝えるために必要な表現に気付くことができた。

これらのことから、聞く力の育成のために、聞く目的（内容や表現など）を明確にすることは有効で



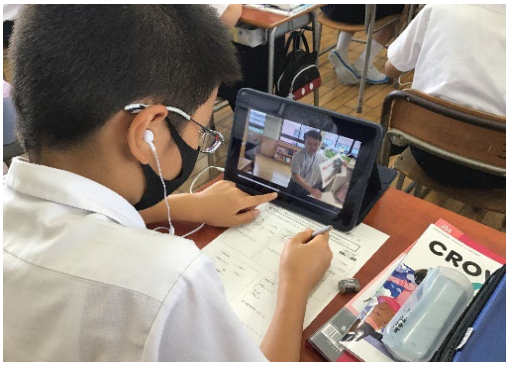
資料６　言語材料に着目して聞き取る

あると言える。本単元で指導した過去時制の表現は、子どもにとって耳慣れない単語も多く、一度聞いただけではわからないこともある。英語の表現に気付かせたい場合は、聞き取らせたい単語を強くはっきり発音する、間をとってゆっくり話す、くり返して聞かせるなど、聞かせ方の工夫も重要である。

②聞き取らせたいポイントや子どもの聞く力に応じて複数回聞かせる

第６学年 JUMP Presentation 1 This is our school.では、「新しくいらっしゃった先生方に附属小学校を紹介しよう」というゴールを設定し、学習を進めた。本時では、先生などに附属小学校の魅力を伝えるために、自分たちに共通のことや学校行事の時期や魅力について、短い話を聞いて具体的な情報を聞き取ることをねらいとした。なお、本単元では、これまでのレッスンで学習した語句や表現を用いて短い話を聞いて目的に応じて具体的な情報を聞き取ることができるかについて、各レッスンで身につけた力を総括的に評価している。

まとまりのある英語を聞いて具体的な情報を聞き取ることができるようにするために、本時では新任の教師たちが前任校について話す動画を子どもに提示した。難しい単語などが含まれる場合はイラストなどの資料を見せるようにした。動画はあらかじめ子どもの端末に配信しておき、子どもが自分の聞く力に応じて複数回聞くことができるようにした（資料７）。また、ワークシートは穴埋めでキーワードを書き込む欄と、「そのほかわかったこと」を自由に記述できる欄を設け、子どもが具体的な情報を聞き取ることができたかどうか評価できるようにした。以下にＥ教諭のスクリプトを示す（資料８）。



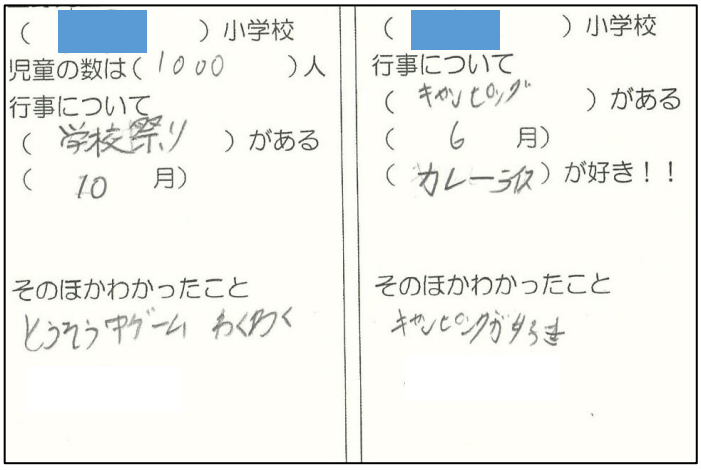
資料７　動画をくりかえし視聴する

Hello! My name is E. I came from □□elementary school in Nonoichi. □□ elementary school is a very big school. There are about 1000 students and 60 teachers. We have a school festival in October. We have a game of tag (*Tosochu* game) at our playground. Teachers and students' parents are hunters. It's very exciting. I like school festival.

資料８　Ｅ教諭の学校紹介のスクリプト

子どもは、端末に配信された動画をくり返し視聴していた。また、わからなくなったら動画を止めたり巻き戻したりして聞く様子も見られた。聞く時間は７分ほど設定していたが、ほぼ全ての子どもがワ

ークシートの空欄を埋めることができていた。資料９はＦ児のワークシートである。Ｆ児はあまり英語が得意な子どもではないが、一つ一つの情報を正確に聞き取っていることに加え、「そのほかわかったこと」についても具体的に記述している。他の教師についても、穴埋めの空欄は全て埋めることができていた。「そのほかわかったこと」については、時間内に全て記述できた子どもは少なかったが、動画を視聴した後に行った、内容を確かめる教師とのやり取りの中で、具体的な情報を聞き取ることができた。


（　　）小学校
児童の数は（ 1000 ）人
行事について
（ 学校祭り ）がある
（ 10 月）
そのほかわかったこと
どうぞうゲーム わくわく

（　　）小学校
行事について
（ キャンピング ）がある
（ 6 月）
（ カレーライス ）が好き！！
そのほかわかったこと
キャンピングが好き

資料９　Ｆ児のワークシート

以上のことから、子どもの聞く力に応じて複数回聞かせることは、具体的な情報を聞き取る上で有効であったと言える。また、ワークシートで聞き取らせたいポイントを穴埋めで示したことで、何を聞き取れば良いかが明確になった。

一方で、本時では記録に残す評価を行ったが、動画を聞いた時点でのワークシートと、教師が内容を確かめるやり取りを行った時点でのワークシートでは、記述されている内容が異なる。本時では、教師が動画を聞いている時点でのワークシートを一人ひとり見取って評価を行ったが、時間的にも内容的にもすべての子どもを正確に評価することが難しかった。適切な評価のためには、動画視聴が終わった時点でワークシートを写真等に撮って残すなどの手だてが必要であるが、そうすることで子どもの思考や授業の流れが中断してしまうことも考えられる。1 時限の中でどのように評価場面を設定し、子どもの様子を適切に見取るかが課題である。

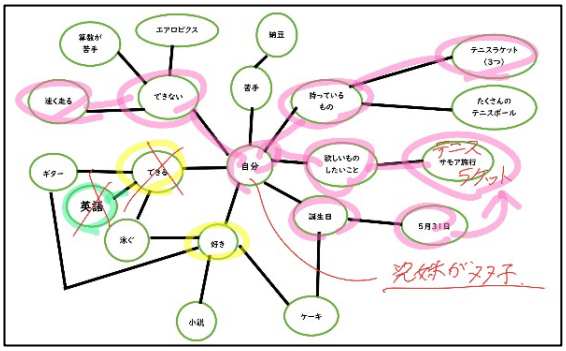
伝える力 自分の伝えたい内容を整理、形成、再構築し、適切な表現を選択・活用して伝え合ったりする力

①モデルを提示し、情報を整理しながら考えを形成したり再構築したりする視点に気付かせる

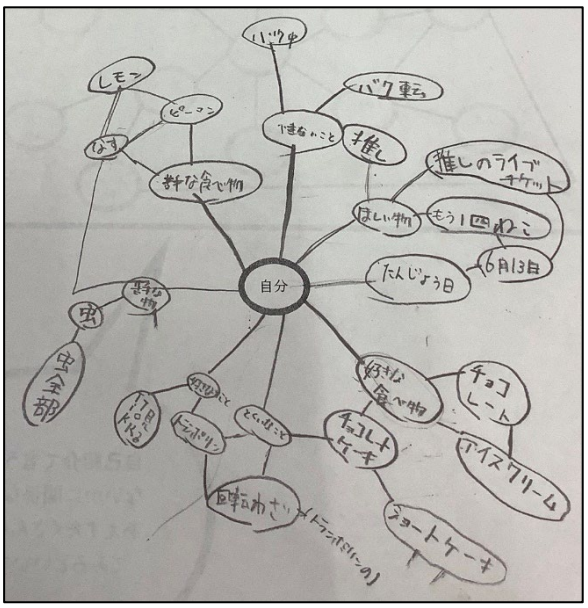
第５学年 Unit1 This is me.における単元のねらいは、友達と仲良くなったり、自分のことをもっとよく知ってもらったりするために、簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分のことを伝えることができるようになることである。本時では、自己紹介発表に向けて自身の発表内容を整理する段階であることから、学習課題を＜自己紹介の内容をレベルアップさせよう＞とし、子どもそれぞれがより自分のことが発表内容を考えることができるようにすることをねらいとした。

伝える力の育成を図るために、各子どもに自分のことを書き表したマッピングシートを作成させ、どのようなことを紹介するのかを考えさせた。また、発表内容を整理する視点に気付かせたりするために、ALT のことをまとめたマッピングのモデルを提示した。

本単元の始めには、発表内容を考える前段階として自身のことについてマッピングシートを用いてまとめさせた。子どもはそれまでに本単元で学習してきた、できること・得意なこと・好き嫌い・誕生日・欲しいものなどの視点をもち、自身のことをまとめた。本時では、発表内容を整理する視点に気付かせるために、ALT のことをまとめたマッピングのモデルを提示し、「もし ALT が自分のことを紹介するとしたら、どんな内容に絞ったらよいだろう。」と子どもに問いかけた（資料 10）。すると子どもからは、「みんなが知っていることを紹介しても面白くないから、自分のあまり知られていないことを伝えると良さそうだ。」や「紹介するものが偏らないように、いろんなものを紹介すると面白い紹介になりそうだ。」という、自分のことをよりよく知ってもらうための視点を持つことができた。その後再び個人思考の時間を設けたところ、先ほどの視点と照らし合わせて、自分たちの発表内容を再構築している様子が見られた（資料 11）。これらのことから、マッピングを使って考えを整理したことと ALT のモデルを提示して再構築する視点をもたせることで、本時のねらいである「それぞれがより良い発表内容を考えることができる」を達成できたと考える。



資料 10　ALT のマッピング



資料 11　発表内容を再構築したマップ

このように、マッピングをして自身の考えを整理したり、モデルを提示して考えを再構築する視点に気付かせたりすることで、子どもの伝える力を育成できると考える。しかし、子どもが目的・場面・状況に合わせて内容を整理したり考えを再構築したりしているかを正しく見取るには、マッピング上に自身の考えの Before と After が現れるようにする必要がある。モデルを通して新たな視点に気づく前は青、気付いた後は赤にするなど、子どもの思考の変容が分かるような手だてが必要である。それらのことを踏まえ、今後も子どもの伝える力を育成につなげていきたい。

②多様な英語表現に触れさせ、教師や友達のモデルを通して伝えたい内容に合わせた適切な表現を選択・活用できるようにする。

第４学年 Unit7 What do you want? における単元のねらいは、食材の言い方や欲しいものを尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しみ、相手の要望や好みに配慮しながら、ピザを作って相手にプレゼントすることができることであり、単元のゴールでは学校にいる先生にピザをプレゼントする活動を設定した。本時では、先生にピザをプレゼントする直前の段階であることから、学習課題を＜友達の好みに合わせたピザを送ろう＞とし、今までに慣れ親しんだ表現を使って友達相手にピザを送ることを通して、相手の要望や好みに合わせてピザをプレゼントできるようになることをねらいとして活動に臨んだ。

まず、友達同士でやり取りを行う前に、ALT と ET とのやり取りのモデルを提示した。ET の思いとしては、ALT にたくさんの野菜が入ったヘルシーピザをプレゼントしたいことを子どもに伝え、資料 12 の流れで ALT とのやり取りを始めた。そこから、子どもを巻き込みながら会話を続けていくと、子どもからは「どの野菜が好きかを聞いたらいいと思う。」「１個だけじゃ物足りないかもしれないから、数も聞いた方がよさそうだね。」「具材が小さいと悲しいから大きさも聞くとよさそうだね。」などの声が上がり、実際子どもたちが今までに慣れ親しんできた英語表現である What ○○ do you like?や How many?などを使って ALT に質問していた。その後、子ども同士でやり取りを行う時間を設け、ピザを送り合う活動を行ったところ、資料 13 のようなやり取りが行われていた。このことから、教師同士のやり取りのモデルを見たことを通して、子どもはより相手の要望や好みに合わせたピザにする方法を知り、その後の友達同士でのやり取りにおいて活用することができ、本時のねらいである「今までに慣れ親しんだ表現を使って友達相手にピザを送ることを通して、相手の要望や好みに合わせてピザをプレゼントできるようになる」を達成できたと考える。

ET：What do you want?
ALT：I want tomatoes, please.
ET：What do you want?
ALT：I want salami, please.
ET：OK. Here you are.
ALT：Oh…. I want more tomatoes and salami.

資料 12　ALT と ET のやり取り

G 児：What vegetable do you like?
H 児：I like tomatoes.
G 児：Big? Small?
H 児：Big , please.
G 児：How many?
H 児：2, please.
G 児：OK. What do you want?(食材を見せながら)
H 児：I want・・・・・。

資料 13　子ども同士のやり取り

このように、モデルを通して多様な英語表現に触れさせることで、後のやり取りにおいて伝えたい内容にあった表現を選択・活用することができ、子どもの伝える力を育成することができる。今後の学習においても、教師や友達のモデルから多様な英語表現に触れさせ、子どもの伝える力の育成につなげていきたい。